

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宮園 健吾

宮園健吾氏の論文 "Delusions as Malfunctioning Beliefs A Biological Defense of Doxasticism about Delusion"は、精神医学で扱われる、いわゆる「妄想」現象に焦点を当てて、それが「心の哲学」や「行為の哲学」において論じられる意味での「信念」として位置づけることができるのかどうか、という問題をきわめて詳細に論じた、野心的かつ先端的な研究成果である。英国バーミンガム大学に留学中ということもあり、英語で執筆され、口述試験も英語で行われた。極度の脅迫観念、家族を別人だと感じる感覚、身体の一部が自分のものではないという感覚などの、「妄想」現象について、それを哲学的に論じるときに現在問題となっているのは、「妄想」も信念の一種であるとする「信念主義」と、「妄想」は信念とは異なる因果的影響をもたらすとする「因果的相違説」との間の対立である。本論文は、そうした論争的対立を詳細に跡づけ、「信念主義」と「因果的相違説」とは実は対立しておらず、両立する、という理解可能性、すなわち「両立主義」を描き出すことを目論む哲学的試みである

宮園氏は、まず第1章において、「信念主義」と「因果的相違説」との双方が提起されてきた議論過程を跡づける。「信念主義」は、妄想者が内容に同意している点で説得的だし、それが病的な信念と見なされている精神医学の現状にも対応するのに対して、「因果的相違説」は、妄想者は客観的証拠に不感的であることや、他の信念と整合性を欠くことなどによって説得力を得る。続いて第2章では、心的現象の「多層的現実化」を指摘することにより、因果的役割が異なるというだけでは信念ではないとは言えないと論じ、「因果的相違説」の問題性を指摘し、両立主義の可能性を開く。そして第3章において宮園氏は、どのような意味での両立主義が可能かについて詳しく論じる。宮園氏が提示するのは、「目的態度機能主義」と呼びうる、信念に関する両立主義である。これはすなわち、信念は、臓器が目的に照らして性格づけられるのと同じ仕方でも性格づけられる、とする見方である。よって、臓器が機能不全に陥ることがあるのと同じように、信念も、因果的役割について機能不全になることがあることになる。こうして、「妄想」も、信念でありつつ、因果的役割が異なるものと理解され、両立主義が立ち現れる。次に第4章で宮園氏は、自身の両立主義を錬磨すべく、「病因的機能」分析を適用する。それによって、信念の機能不全が説明可能になるとされる。最後の第5章では、「目的態度機能主義」に沿って、結果的に「信念主義」が単に「因果的相違説」と両立するだけでなく、真実に限りなく近いことが指摘され、精神医学と哲学との連携可能性が示される。

生物学的あるいは進化理論的に「目的態度機能主義」を導入しているにもかかわらず、「自然選択」にのみ議論が傾斜し、「遺伝的浮動」という進化の重大な側面があまり考慮されていないという弱点はあるものの、全体として、まことに緻密でありつつもチャレンジングな議論が展開されており、先端的研究として国際的に十分に通用すると思量される。よって、博士(文学)の学位に十分に値すると判断される。